

博士學位論文内容の要旨

学位申請者氏名	阿部 亜紀		
論文題目	白瀧幾之助の生涯と芸術 —近代日本洋画における技法と画題の展開—		
論文審査担当者	主査	前崎 信也	㊞
	審査委員	成実 弘至	㊞
	審査委員	廣田 孝	㊞
<p>白瀧幾之助（1873-1960）は兵庫県朝来市生野町に生まれ、山本芳翠（1850-1906）や黒田清輝（1866-1924）に師事した洋画家である。代表作として知られる東京美術学校の卒業制作《稽古》（東京藝術大学大学美術館所蔵）には、陰影部分に青みがかった色や紫を使用する、新派・紫派の画家の特徴が見られる。卒業後は欧米諸国で約7年間の留学生生活を経験し、1913年の第3回東京勸業博覧会で《百合の花》が三等賞、第8回文展で二等賞受賞を受賞。その後は官展を中心に審査員を務めるなど活動した。また、1952年には洋画界に尽力した功績を讃えられ「日本芸術院恩賜賞」を受賞するなど、明治期から昭和期という近代洋画の黎明期に活躍した画家である。</p> <p>白瀧をはじめとする近代の洋画家に関する研究は、一部の有名画家を除き、経歴や画業が不明なことが多い。白瀧の場合、同郷の和田三造（1883-1967）、青山熊治（1886-1932）と共に「生野三巨匠」に数えられていることから、3人での展覧会はたびたび開かれているが、個展については、2010年に姫路市立美術館で開催された「白瀧幾之助—没後50年—」が唯一の展覧会であり、同展の成果により、ようやく白瀧の画業が概観できるようになった。本論ではこれらの先行研究を踏まえた上で、新出の作品や資料、親族への聞き取り、同時代の芸術家たちとの交流の精査をおこない、白瀧幾之助の芸術の成立と展開を明らかにすることを目的としている。さらに彼は水彩画やテンペラ画の普及にも尽力したことが知られている画家である。白瀧の画家としての業績を明らかにすることは、近代日本における西洋画の技法や画題の展開を把握する上においても重要な指標を提示することができる。</p> <p>第1章では、白瀧幾之助の生涯や交友関係から、近代の洋画家の活動の場について詳述した。白瀧は画学生時代、黒田清輝に師事し、天真道場時代には岡田三郎助（1869-1939）、藤島武二（1867-1943）らと机を並べた。その際、陰影部分に青や紫を用いる技法を学び得たことから、紫派や新派の画家として知られている。しかし、彼の画業は外光的な制作に留まらず、肖像画や活人画の制作にも携わり、1913年には日本水彩画会を立ち上げ、1928年には日本テンペラ画会に参加するなど、油彩以外の絵具にも着目し、その取り組みは多岐にわたっていた。こういった多様な活動において、洋画家だけではなく、日本画家・建築家・実業家など幅広い交友関係を築いていた。本章ではそれらについてまとめ、白瀧の画家としての生涯と、彼が生きた近代の芸術サークルの実態に注目する。</p>			

第2章では、永井荷風（1879-1959）と三井高精（1881-1970）を例に、白瀧のあまり知られていない交友関係と画業への影響について、2節に分けて研究を推し進めた。第1節では、小説家の永井荷風が気鋭の作家として注目される直前に上梓した『ふらんす物語』（1909）「再会」に登場する洋画家「蕉雨」のモデルが白瀧だった可能性を指摘するものである。洋画家「蕉雨」のモデルの考察はこれまで議論が重ねられてきたテーマのひとつであり、「蕉雨」のモデルには永井自身とするもの、白瀧とするものなど多岐に及んでいた。本節では両者の具体的な交流時期を見直し、「再会」に登場する洋画家「蕉雨」と、白瀧の言動や精神性の比較・考察を試みた。第2節では、白瀧が「日本芸術院恩賜賞」を受賞するきっかけとなった三井洋画コレクションの蒐集活動や、三井高精との交友関係について取りまとめ、白瀧の画業にどのような影響を及ぼしたのかについて論じるものである。

第3章では、2018年に京都女子大学前崎研究室の所蔵となった「白瀧幾之助写真資料」（以下、写真資料）について紹介する。本資料は、実際に白瀧が旧蔵していたと考えられる約1,500点もの写真である。これらを精査・研究することで、文献資料では知り得なかった白瀧の交流関係や作品の制作背景までも明らかとなり、重要な資料であることが分かった。本章では、資料が現在の所有者の手に渡るまでの経緯を今一度確認するとともに、内容の整理を行った結果を報告する。

第4章では、5節に分けて白瀧の作品研究を行った。第1節では、白瀧の肖像画家としての画業をとりまとめ、顕彰するとともに、「写真資料」に含まれていた「藤村男爵夫人」の肖像写真5点と、姫路市立美術館所蔵の《婦人像》との関係を紐解く。第2節では、《稽古》の制作背景とともに、これまで深く研究されてこなかった磯谷商店を経営する長尾家との関わりについて精査する。第3節では、《ペチュニア》と《鶏頭》のモデルが、株式会社サカタのタネの創業者・坂田武雄が開発した新品種の花である可能性を検討する。第4節では、1913年開催の第7回文展に出品した神話画《羽衣》を取り上げ、その制作背景などを明らかにする。そして第5節では白瀧が1920年頃に描いた《金魚と子供》について、写真を用いて描いた可能性や、花に花言葉の意味を寓意していた可能性を提示した。

第5章では、白瀧の水彩画家およびテンペラ画家としての業績について2節に分けて考察した。当時、水彩画の評価は油彩画と比較して一段低いものとされている中で、白瀧は水彩画の普及にも尽力した。彼は画学生時代からすでに水彩画に取り組み、欧米諸国へ留学中にも数多くの風景画を描いている。そして帰国から3年後、丸山晚霞（1867-1942）、石井柏亭（1882-1958）、小島鳥水（1873-1948）らと共に「日本水彩画会」を創設。水彩画は油彩画の二番煎じではなく、それに並ぶ顔料だと指摘した。第2節では、白瀧と「日本テンペラ画会」との関係について考察した。テンペラ画会は1928年に白瀧や平沢貞通、岡田三郎助らを主要メンバーに創設された団体だった。しかし、同会についての資料は乏しく、白瀧との関係についてもこれまで等閑されてきた。そこで本章では限られた文献資料を精査し、その関係性について追究を試みた。

以上を踏まえて、本論では、明治期から大正期を中心に美術史や美術運動史に働き、貢献を続けた白瀧幾之助の活動を基盤としながら、日本の近代洋画における技法や、画題の展開について論じた。油彩はもちろん水彩、テンペラなど各分野に存在感を示した彼は、洋画家として特筆すべき人物であり、近年新たに発見された「白瀧幾之助写真資料」を含む多方面から考察することは、日本の洋画史そのものの再考にも繋がるものである。